

最後の大杉

内田魯庵

青空文庫

一

大杉^{おおすぎ}とは親友という関係じゃない。が、最後のひと月を同じ番地で暮したのは何かの因縁であろう。大杉が初めて来たのは赤旗事件の監房生活から出獄して間もなくだった。淀橋^{よどばし}へ移転してから家が近くなったので頻繁^{ひんぱん}に來た。思想上の話もしたし、社会主義の話もしたが、肝胆相照らしたというわけでもないから多くは文壇や世間の噂^{うわさ}ばなしだった。

大杉は興味がかなり広くて話題にも富んでいた。近年ファールブルのものを頻^{しき}りに翻譯していたが、この種の文学的^{ないし}乃至學術的興味を早くから持っていて、主義者^{はだ}肌よりはむしろ文人肌であった。小説も好きなら芝居も好き、性的研究などにも興味を持って、性的研究に率先した小倉清三郎の「相對」の会などにも毎度出席して、能く^{よく}「相對」の会の噂をした。

百^{ひやく}人^{にん}町^{ちよう}を移転^{ひっこ}してから家が遠くなったので自然足が遠のいた。如之^{のみ}ならず、神^{かみち}近^かや野枝^{のえ}さんとの自由恋愛を大杉自身の口から早く聞かされたが、常から放縱な恋愛を

聾^{ひんしゆく} 燈^{とう} する自分は杉のかなりに打明けた正直な告白に 苦^{にが}虫^{むし}を潰^{つぶ}さないまでも余り同感しなかったのを氣^き拙^{さます}く思つたと見えて、家が遠くなると同時に足^{あし}が遠^{とほ}のいてしまった。日蔭^{ひかげ}の茶屋の事件があつた時、早速見舞の手紙を送ると直ぐ自筆の返事を遣^{よこ}したが、事件が落着いてもそれぎり会わなかった。それから程^{ほど}経^へつて野枝さんと二人で銀座をブラブラしている処へ偶然邂逅^{でつくわ}し、十五分ばかり立話しをした事があつたが、それ以来最近の数年間はただ新聞で噂を聞くだけであつた。

大杉が仏蘭西^{フランス}から追返され、神戸へ帰着して出迎えの家族と一緒に一等寝台車で東上した記事が写真入りで新聞を賑^{にぎ}わしてから間もなくだった。或る朝突然大杉さんがいらしたと家人が取次いだ。大杉何という人だと訊^きくと、大杉栄^{さかえ}さんで皆さん御一緒ですといった。近頃何年にも顔を見せた事がない大杉が、シカモ家族を伴^つて来るといふは余り思掛けなかったが、左^{ひだり}も右^{みぎ}も二階へ通せと半信半疑でいうと、やがてトントン階段^{はしご}を上つて来たのは白地の浴衣^{ゆかた}の紛れもない大杉であつた。数年前の大杉と少しも違わない大杉であつた。その踵^{あと}から児供^{こども}を抱いて大きなお腹^{なか}の野枝さんと新聞の写真でお馴染^{なじみ}の魔子ちゃんがついて来た。

野枝さんとは数年前に銀座で邂逅^{であ}つた時に大杉が紹介してくれた。が、十分か十五分の

立話中、大杉から遠く離れていたからこの日が初対面同様であつた。これが魔子で、これがルイゼで、この外にマダ二人、近日お腹を飛出すのもマダあるといつて笑つた。以前から見ると面差が穏かになつて、取別けて児供に物をいう時は物柔しく、こうして親子夫婦並んだ処は少しも危険人物らしくも革命家らしくもなかつた。

「イイお父さんになつたネ、」と覚えずいうと、野枝さんと顔を見合わしてアハハハと笑つた。

二

久しぶりで全家お揃いは珍らしいという、昨日同番地へ移転して来たといった。ツイそこの酒屋の裏だというから段々訊くと、近頃まで何とかいう女医が住んでいた家だ。「あの家は本とお医者さんで、移転したてに家の塀の角へ看板を出さしてくれとタウルを半ダース持つて頼みに来た、」という、と、「そんなら僕も看板を出さしてもらおうかな」といった。「アナーキストの看板じゃタウルの半ダースぐらいじゃ引受けられない」といつて笑つた。

魔子は臆^{おく}面^{めん}のない無邪気な子で、来ると早々私の子と一緒に遊び出した。野枝さんの膝^{ひざ}に抱かれたぎりのルイゼはマダあんよの出来ない可愛い子で、何をいつても合点々々ばかりしていた。アツチもコツチもお菓子^{おかし}を慾張^{よくば}つて喰^たべこぼすのを野枝さんが一々拾^{ひろ}つて世話する処はやはり世間並^{なみ}のお母さんであつた。エンマ・ゴルドマンを私淑する危険な女アナーキストとは少しも見えなかつた。「日本ばかりじゃ騒^{さわ}がし足りないと見えて、仏蘭西までも騒^{さわ}がして来たネ。雀百^{すずめ}まで躍^{おど}りやまずで、コンナに多^{おほ}勢^{せい}の子持^{こもち}になつてもやはり浮気はやまんと見えるネ」というと、「やはり時代病かも知れない」と大杉は吃^{ども}りながらいった。

「それでも」と野枝さんは微笑^{ほほえ}みつつ、「尾行^{びこう}が申しましたよ。児供が出来てから大變温^お和^なしくなつたと。」

大杉が児供を見る眼はイツモ柔和な微笑を帯びて、一見して誰にでも児煩惱^{こぼんのう}であるのが点頭^{うなず}かれた。野枝さんも児供が産^うまれる度^{たび}に、児供が長^{おほ}きくなるごとに青鞥^{せいとう}時代の鋭^とい機鋒^{きはほう}が段々と円^{まる}くされたろうと思う。

野枝さんは児供を伴^{とも}れて先^まきへ歸^{かへ}つたが、大杉は久しぶりユツクリと腰^{こし}を落^お付^けけた。正午になつて迎^{むか}えが来ても根^ねを生^はやして、有^{あり}合^{あい}の午^{ひる}飯^{めし}を一緒^{いっしょ}に済^すまして三時^{さんじ}ごろまで

も話し込んだ。仏蘭西から帰りたてなので、巴黎で捕縛されて監獄へ投り込まれた咄をボツボツ話した。尤も纏まった話でなく、断れ断れで思想上の立入った問題には触れなかった。路傍演説をして捕縛された咄はしたが、その演説の内容は訊きもしなかったし話しもしなかった。ただ仏蘭西人は一般に案外日本人よりも無知で、何しに來たというから社会学を勉強に來たという、その社会学という言葉の意味の解るものが少かったという事や、仏蘭西の巡查が人格も知識も日本の巡查よりも低劣で、第一言語からして野卑で、教養ある仏語が全く通じないという事や、仏蘭西の監獄が不整頓で不潔で、囚人の食事が粗悪で分量が少く、どの点から見ても日本の監獄以下であるという事や、何くれとなく仏蘭西を貶した話ばかりした。

「ただ仏蘭西の監獄で便利なのは差入の自由です。日本同様監獄の前に差入物屋があつて、錢さえ出せばどんなウマイものでも、酒でも煙草でも買う事が出来ます。僕は余り酒を喫らな、書物は格別持たず、面會に來るものはないし、退屈で堪らんから白葡萄酒を買つてゴロゴロしながらチビチビ飲む。三日で一本明けたが、終日陶然としてイイ心持でした。錢さえあれば仏蘭西の監獄はさほど苦しくない。当てがいの食物が足りなくても不味くても差入物屋から取りさえすれば相當な贅沢が出来ます。氣樂に読書でもしてい

ようにには仏蘭西の監獄は贅沢が出来て気が散らんから持つて来いですよ。」
そんな話をして半日を何年ぶりで語り過ごした。

三

それから四、五日して銭湯で会った。魔子を伴れて洗粉あらいこや石鹼せっけんや七ツ道具そろを揃えて流しを取ったこの児煩惱のお父さんが、官憲から鬼神のように恐れられてる大危険人物だとは恐らく番台の娘も流しの三助さんすけも気が付かなかったろう。が、表へ出て見ると湯屋の角の交番で飛白かすりの羽織の尾行が張番はりばんをしていた。

ツイ眼と鼻との間におりながらそれぎり大杉は来もしなかったし、私もお産があつたと聞いたが見舞にも喜びにも行かなかった。が、大杉は始終乳母車うばぐるまへ児供を乗せて近所を運動していたから、能く表で出会つては十分十五分の立話しをした。魔子は毎日遊びに来たから全うちじゅう家が馴染なじみになり、姿を見せない日は殆んどほとなかったから、大杉や野枝とは余り顔を合わせないでも一家の親しみは前よりは深かった。

九月一日の地震のあと、近所隣りと一つに凝かたまって門外で避難していると、大杉はルイ

ゼを抱いて魔子を伴れてやって来た。

「どうだった。エライ地震だね。君の家は無事だったかね？」と訊くと、

「壁が少し落ちたが、大した被害はない。だが、吃驚びっくりした。家が潰れるかと思った。」

「下町したまちはヒドカろうナ。安政ほどじやなカろうが二十七年のよりはタシカに大きい。これで先ず当分は目茶苦茶だ。」

「だが僕は、毎日々々セツ付かれて困つてたんだから、地震のお底かげで催促の手が少しは緩ゆるむだろうと地震に感謝している、」と軽く笑った。何でも大杉は改造社とアルスから近刊する著書の校正や書足かきたしの原稿に忙殺されていたのだそうだ。

かれこれ小一時間こも自分たちと一緒に避難していたろう。余震の絶間たえまなく揺る最中で、新宿から火事が出たとか、帝劇が今燃えてるとかいう警報が頻りであつたので、近所隣りの人々がソワソワして往いつたり来たりしていた。

そこへ安成やすなりじろう二郎がコダツクを下げて来て、イイ獲物もがなとソコロコラの避難の集まりを物色していた。

「ドウだい、」と私は安成に向つていった。「大杉に何処どこかソコロの木の下に立つてもらつてアナーキストの避難は面白カろう。」

大杉は笑っていた。安成がこの写真を撮^とったら好^いい記念だったろうに、惜^{しい}い事をした。（後に聞くと、それから大杉の自宅へ行つて大杉夫妻を庭前で撮^うつたのだが、名人だから光線が入ったのだそうだ。）

その晩は恐怖に明けて翌る朝、近所の川^{かわ}本の原^{もと}に大勢^{おおぜい}避難していると聞いて容子を
見に行つた戻りに大杉の家を尋ねると、マダ寝ていたが私の声を聞くと起きて来た。

「能^よく家の中に寝たネ、」というと、

「大抵大丈夫だろうと度胸をきめて家の中で寝た。尤も、」と塀^{へい}の外を指^さして、「彼^{あそこ}処へ避難所を拵^{こぎ}いて置いて、率^いざといえど直ぐ逃げ出す用意はしていた。アナーキストでも地震の威力には協^{かな}わらない、」と笑つた。

九月の上半は恐怖時代だった。流言蜚語^{ひご}は間断なく飛んで物情^{きやうきやう}恟々^{きやうきやう}、何をするにも落付かれないで仕事^{ひきこも}が手に付かなかった。大杉も引籠^{ひきこも}つて落付いて仕事をしていられないと見えて、日に何度となく乳母車を押しては近所を運動していたから、表へ出るとは番^{ばん}毎^{えん}に邂逅^{であ}つた。遠州^{えんしゅう}縞^{しま}の湯上りの尻^{しり}絡^{から}げで、プロの生活には不似合^{ふにがひ}いな金紋^{きんもん}黒^{くろ}塗^りの乳母車を押して行く容子は抱^かえの車夫か門番が主人の赤ちゃんのお守をしているとしか見えなかった。地震の当座、私の家の裏木戸は大抵明け放しになっていたので、能^よく

裏木戸からヒョッコリ児供を抱いてノツソリ入つて来ては縁端へ腰を掛けて話し込んだ。

日は忘れたが或る晩、夜警の提灯ちようちんを持つて家の角に立つてると、買物帰りらしい野枝さんが通り掛つて声を掛けた。左の手には大きな部厚ぶあつの洋書を二冊抱え、右には新聞と小さな風呂敷包ふろしきづつみを下げていた。

「報知の夕刊を御覧なすつて？」

「否いいエ。」その頃はマダ新聞が配達されなかつた。

「鎌倉は大変ですワ。八幡さまが潰れて大仏さまが何寸とか前へ揺り出しましたつて。御覧なさいまし、」と手に持つ新聞を見せた。

提灯あかりの照明ではハッキリ解らなかつたが、ちよつと覗のぞいて直ぐ返すと、

「お宅へ持つてらしつて御覧なさいまし、」と頻しきりにいったが、野枝さんも今買つて来たばかりでマダ読まないので無理に押返した。

「夜警は大変ですワネ。家から椅子を持つて参りましようか。イクラもありますから。」

「イエ、家にも持つてくれればあるんですが、面倒だもんですから。」

「そうですか。でもお草臥くたびれでしょうネ。大杉も御近所同士で家の角へ夜警に毎晩出ておりますワ。町内のお附合いですもの、」と野枝さんはいった。

能く大杉は夜警に出ると思つたが、實際毎晩ステッキを持って、自宅の曲り角へ夜警に出ているを見た。

四

鮮人襲来の流言蜚語が八方に飛ぶと共に、鮮人の背後に社会主義者があるという声がイツとなく高くなつて、鮮人狩が主義者狩となり、主義者の身边が段々危うくなつた。この騒ぎを余所^{よそ}に大杉は相変らず従容^{しやうよう}として児供の乳母車を推して運動していた。

「用心しなけりやイカンゼ」と或時邂逅^{であ}つた時にいうと、

「用心したつて仕方がない。捕まる時は捕まる」と笑つていた。後に聞くと、大杉に注意したものは何人もあつたが、事実この頃の大杉は社会運動からは全く離れて子守ばかりしていたから、危険が身に迫つてるとは夢にも思つてないらしかった。

或る夕方、夜警に出ていると、警官が四、五人足早に通り過ぎながら、今二人伴^つれて来るから殴^ぶつちやア不可^{いか}んぞと呼ばわつた。その頃の自警団は気が立っていて、警吏が検挙して来たものにさえ暴行を加えて憚^{はば}らなかつたからだ。

誰か挙げられるナ、主義者だろうと、誰いうとなく予覺して胸を躍らしていると、やがて七、八人の警吏が各々めいめい ゆみはり弓張を照らしつつ中ちゆうぜい背の浴衣掛けの尻端折しりはしおりの男と、浴衣に引掛ひっかけ帯の女の前後左右を囲んで行く跡から四、五十人の自警団が各々ちようちん提灯を持つてゾロゾロ従ついて行つた。

提灯の薄明りで夜目にはシカと解らなかつたが、背恰好せかつこうが何となく似ていたので、「大杉じゃないか知らん、」と、ハツと思つて急に不安になつたので、大杉の家へ曲る角の夜警の集まりへ行つた。そこにはいつでも警吏がいた。

「今のは鮮人ですか？」と訊くと、「鮮人じゃない、」と誰かが答えた。

「ドコで挙げられたんですか、」と重ねて訊くと、「直ぐすソコの自宅で挙げられたんだ」と同じ人が答えた。

「大杉じゃないですか、」と思切つて明らさまに訊くと、

「イヤ、大杉じゃない。大杉は家にいる、」と警察官らしいのが答えた。

それでヤツと安心したが、マダ何となく不安で、家へ歸つて床に就いてからも警吏と自警団に護送されて行く男女の後姿が眼にチラクラした。（後に聞くと、この男女は直ぐ近所の近頃検挙された或る社会主義者の家の留守番をしている某雑誌記者で、女は偶然居合

わした主義にも何にも関係のないものだそうだと。この男は沖繩人で相貌が内地人らしくないので疾うから覘ねらわれていたのだそうだと、当人が後に來ての話である。」

その頃から大杉に対する界限かいがいの物騒な噂が度々耳に入った。大杉は外国の無政府党から資金を持つて來て革命を起そうとしているとか、大杉は毎晩子分を十五、六人も集めて隠謀を密議しているとか、「あんな危険人物が町内には安心が出来ないからヤツつけてやれ」とか、或る近所の自警団では大杉を目茶苦茶に殴なぐつてやれという密々の相談があるとか、嘘うそか実まことか知らぬがそういう不穩の沙汰を度々耳にした。随分相当分別のある人までがそういう虚聞を信じて、私と大杉とが交際あるのを知らないで、「アナタのお宅の裏には大變な危険人物がいて、毎晩多勢おおぜい集つて隠謀を企たくらんでるそうです、」と告げたものもあった。同じ近所の或る口利きの男は、これも大杉と私と友人関係であるのを知らないで、「柏木かしわぎには危険人物がある、大杉一味の主義者を往来へ列ならべて置いて、片端かたっぱしからピストルでストーンストン打つたら小氣味こきみが宜よからう」とパルチザン然たる氣焰きえんを吐いてイイ氣持になつてゐるものもあった。

こういう危険な空氣が一部に醸かもされてるのを知つてゐるのか知らないのか、大杉は一向平氣で相變らず毎日乳母車を押していた。近所に住む大杉の或る友達がそれとなく警戒した

が、迫害に馴^なれてる大杉は平気な顔をして笑っていたそうだ。ただ笑ってるばかりならイイが、「俺を捕^{つか}まえようてには一師団の兵が要^いる」ナドト大言していた。大杉にはこういう児供げた見^み得^えを切つて空言を吐く癖があつたので、この見^み得^えを切るのが大杉を花やかな役者にもしたが、同時に奇禍を買う原因の一つともなつた。

五

九月の十六日の朝九時頃、大杉は野枝さんと二人連れで、二人とも洋装で出掛けるのを家人は裏庭の垣根越しにチラと見た。直ぐ近くの聖書学院の西洋人だろうと思つてると、丁度遊びに来ていた魔子も後^{うしろ}影^{かげ}を見ると周章^{あわ}てて垣根の外へ飛び出したが、すぐ戻つて来て、「家のパパとママよ」といった。

その日の午後魔子は来て「パパとママは鶴^{つる}見^みの叔父^{おじ}さん許^{とこ}へ行つたの。今夜はお泊りかも知れないのよ」といった。

それぎり大杉は姿を見せなかつた。が、自分もその頃余り表へ出なかつたから大杉を見掛けないでも格別気にも留めなかつた。

二、三日経つと大杉が検挙されたという風説が立った。その前にも地方から来た或る男が、大杉は拘留されて留置檻へ入れられたまま火事で焼死んだそうだなというから、大杉は直ぐこの近所にて、毎日乳母車を押して運動しているといつて無根の風説を笑った事があるので、復た例の風説かと一笑に附していた。

するとその翌る晩、十一時過ぎに安成が来て、「大杉が行方不明となりました、」と痛く昂奮して、「十六日鶴見へ行つたぎりて帰つて来ません。家でも心配して八方捜しているがサツパリ踪跡が解りません。検挙されたなら検挙されたでドコかの警察にいそうなもんですが、ドコの警察にもいません。警察では検挙したものを検挙しないと秘す事は絶対にないので、全く警察にはいないようです、」と満面不安の色を湛えて昂奮して話した。

血 腥 い噂がそこら中に広がつてゐる時である。女のような美術家が袋叩きにされて半死半生になつたという噂も聞いている。温厚玉のような君子が歴とした官職の肩書きの名刺を示しても聞かれないで警察へ拘留されたという話も聞いている。ましてや大杉のような官憲からも睨まれ民衆の一部からも呪われてる人間は何時どんな処で奇禍を買わないとも限らんから、行方不明になつたと聞くと不安に堪えられなかった。

安成は、その日あたかも戒嚴軍司令官を初め二、三の陸軍の重職が交迭し、一大尉一特

務曹^{そうちよう}長が軍法会議に廻されたという明日発表される軍憲の移動を話して、こういう重職の交迭は決して尋常事^{ただごと}ではない。よほどの重大な原因がなければならぬ。当局者の言明に由れば数日前に突発した事件に關聯するというのが、その突発事故というのは何だか、マダ発表を許されないと堅く緘黙^{かんもく}している。が、ウツカリ当局者が滑^{すべ}らした口吻^{くちふり}に由ると不法殺人であつて、殺されたものは支那人や朝鮮人でないのは明言するというのだ。「どうもそれが大杉らしいのです、」と安成は痛く昂奮していた。

ヨモヤとは思ふが、大杉は野枝と一緒に鶴見の弟の家から季^{すえ}の妹の子を伴れて、弟に送られて川崎まで歸つて來たのはタシカで、それから先きが行方不明なのだそうだ。マサカに足弱^{あしよわ}を連れて交通の不便なこの際に野越え山越え行方を晦^{くら}ましたとは思われない。ドコかに拘留されてるに違ひないが、ドコの警察にもいないとすれば陸軍より外にはない。が、陸軍では知らないという。が、支那人でも朝鮮人でもないものを殺した不法殺人で戒嚴軍司令官初め二、三の重職が解職され、一、二の軍憲が司法へ廻されたというこの日の突発事件はヨモヤとは思ふがドウも大杉と關聯しているらしいというのが安成の憶測であつた。

が、その翌る日も、そのまた翌る日も魔子は相變らず遊びに來た。児供の事で周囲の不

安には一向感じないらしく、毎日来ては家の児供と一緒に歌を歌ったりダンスをしたりして無邪気に遊んでいた。大杉の家もヤヤ人^{ひと}出入^{でいり}が繁^{しげ}く取込んでるらしく想像されたが、安成もそれぎり見えないので、不安を感じながら身辺の雑事に紛れていると、或時魔子がイツモの通り遊びに来ていと家から迎えが来て帰った。暫らくすると復^また来て、新聞社の人が来て写真を撮ったのよといった。新聞社が児供の写真を撮りに来たというのは尋常ではないので、恐ろしい悲痛な現実^{じつ}に面する時が刻々迫って来たような感じがした。

その翌日である、大杉の非業の最期が公表されたのは。恐ろしい予感が刻々迫って来て、こういう悲惨を聞く日があるのを予期しない事はなかったが、その日の朝刊の第一面の大活字を見た時は何ともいい知れない^{おのの}悸^{おの}きが身^{からだ}中^{じゅう}を走^{はし}るような心地^{こころち}がした。殊に軍憲から発表された大杉外二名の一人がマダ可憐^{かれん}な小児であると思うと、三族を誅^{ちゆう}する時代の軍記物語か小説かでなければ見られない余りの殘虐に胸が潰れた。

朝の食卓は大杉夫婦を知る家族の沈痛な沈黙の中に終った。今日も魔子は遊びに来るかも知れないが、「魔子ちゃんが来ても魔子ちゃんの^{はなし}咄^{はなし}をしてはイケナイよ、」と小さい児供を戒めた。何にも解らない小さい児供たちも何事か恐ろしい事があったのだという顔をして、黙^{うなず}って点頭^{うなず}していた。

暫らくすると魔子は果して平生いづもの通り裏口から入つて来た。家人を見ると直ぐ「パパもママも死んじやつたの。伯父さんとお祖父じいさんがパパとママのお迎えに行つたから今日は自動車で歸つて来るの、」といった。お祖父さんというのは東京より地方へ先きに広がつた大杉の変事を遠い郷里の九州で聞いて倉皇そうこう上京した野枝さんの伯父さんである。茶の間へ来て魔子は私の妻を見て復た繰返した。「伯母おばさん、パパもママも殺されちやつたの。今日新聞に出ていましょう。」

私は児供たちに「魔子ちゃんのお父さんの咄はなをしてはイケナイよ、」と固く封じて不便ふびんな魔子の小さな心を少しでも傷いためまいとしたが、怜悯れいりな魔子は何も彼も承知していた。が、物の弁わきまえも十分でない七歳の子である。父や母の悲惨な運命を知りつつもイツモの通り無邪気に遊んでいた。同い年おなじしの私の児供は魔子を不便ふびんがったと見えて、大切にだいじにしていた姉あねさ様や千代紙を残らず魔子に与やつてしまった。

六

その日は大杉の遺骸いがいが帰るといので、留守番だけの大杉の家へ二度も三度も容子を聴

きに行つた。この晩は大杉に親しいものだけが遺骸の前で通夜つやするという予定だったので、午後からは待受けしてボツボツ集まるものがあつた。自働車の音の響く度毎たんびに耳を傾けたが、イツまで待つても歸つて来なかつた。その中に遺骸は直ちに自宅へ引取るはずだったが、余り腐爛ふらんしているので余儀なく直ちに火葬場へ送棺したと知らせて来た。

その夕方、遺骸を引取つて火葬場まで送つた近親同志が歸つて来た。待受けた我々は官憲の口から語られたという大杉の殺害された顛末てんまつや、引渡された遺骸が腐爛して臭氣が鼻を衝ついて近寄る事さえ出来なかつたという咄を聞いた。大杉の思想の共鳴者でなくともその悲惨な運命には同情せずにはいられなかつた。

その翌々日の朝、大杉外二名の遺骨は小さな箱へ入れられて自宅に迎えられた。大杉は無宗教であつたが、遺骨の箱の前に三人の写真を建て、祭壇を設けて好きな葡萄酒と果物を供えた。その晩は近親と同志とホンの少数の友人だけが祭壇の前に団居まどいして、生前を追懐たむしつつ香を手向けて形ばかりの告別式を営んだ。門前及び附近の要所々々は物々しく警官が見張つて出入するものに一々眼を光らした。折悪おりあしく震災後の交通がマダ常態に復さないで、電車の通ずる宵よいの中に散会うちしたが、罪の道伴れとなつた不運の宗一の可憐な写真や薄命の遺子の無邪気に遊び戯れるのを見ては誰しも涙ぐまずにはいられなかつた。大

杉の一生を花やかにした野枝さんとの恋愛の犠牲となった先妻の堀保子も、イヤで別れたのでない大杉に最後の訣別わかれを告げに来て慎ましやかに控えていたが、恋と生活やつとに瘦れた姿は淋しかった。（大杉と別れた後の堀保子は大杉は必ず再び自分の懷ふところに戻ってくるものと固く確信して孤独の清い生涯を守っていたが、大杉が果敢はかなくなつた後はその希望も絶えて、同棲時代からの宿痾しゆくあが俄に重つて、去年の春終ついに大杉の跡を追つて易簣えきさくした。大杉の生涯は革命家の生血なまぢの滴したたる戦闘であつたが、同時に二人の女に纏もつれ合う恋の三つ巴どもえの一代記でもあつた。）

告別式の済んだ跡の大杉の家は淋しかった。遺子を中心として野枝さんの伯父さん老夫妻と大杉の実弟と、大杉の異体同心たる数四の同志に守られていた。刑事の眼は門前に光つて看慣みなれぬものは一々誰何すいかしたから、誰もイイ氣持がしないで尋ねるものが余りなかつた。いよいよ明日は一と先ず郷里へ引上げるというその前夜、長い汽車の旅の児供の眠氣ざましにもと些いささかの餞はなむけを持つて私の妻が玄関まで尋ねた時も誰何され、何の用事かと訊問された。

十月二日だった。五人の遺子は野枝の伯父さん老夫婦に伴われてこの恨の多い父の家を跡に郷里へと旅立つた。親しい友や同志に送られて行つたが、魔子は先きへ立つて元氣よ

く「さよなら、さよなら！」といって駈けて行った。パパもママも煙のように消えてしまった悲みをも知らぬ顔の無邪氣の後ろ姿が涙ぐましかった。

(大正十二年九月記 ○大正十三年十月補筆 ○改造社出版『大正大震災誌』中所掲「甘粕対大杉事件」参照)

追記

大杉が警察のスパイであつて主義者の秘密を供給していたので、大杉殺害が警察と陸軍との反目になつたという噂が当時或る一部に広がった。近頃また警視庁の特高課とスパイの関係が暴露されて問題となつたについて、警視庁のスパイには往々意外の人があるという話から大杉もまたスパイであつたように臭わした或人の談話が某紙に載つておる。

一体噂ぐらいアテにならぬものはないので、大抵な噂の出処が出鱈目である。出鱈目ではないはずの当事者や関係者の話からしてアテにならぬが多い。大杉が果してスパイであつた乎否乎の謎は大杉自身が鍵を握つてるので、余人の推測は余りアテにならないが、大杉がもし果して真にスパイであつたなら問題の何とかいう男のように月給何百円も貰つて

自働車で出入しないまでも最^もう少し貧乏しないでも済んだろう。貧乏してまでも同志を欺^{はかりごと}く苦肉の謀^{はかりごと}をしてお上^{かみ}の御用を勤めていたというなら、それこそ楠^{くすのき}正^{まさ}成^{さき}ほどでなくとも赤穂^{あこう}の義士ぐらいに値踏み出来る国家の功勞者である。沖^{おき}や横川^{よこかわ}と一緒に招魂社に祀^{まつ}られてもイイわけだ。

大杉は時^{ときたま}偶金^{ぐきん}が手に入るとむやみと自働車を飛ばしたりして不相當な贅^{ぜいたく}沢^{たく}をするので同志者の反感を買った。この贅沢の資本がもしスパイの報酬として請取^{うけと}った金なら公々然と同志の前で札びらを切る事は豈^{よも}夫出来なかつたろう。大杉は一時は米^{べい}塩^{えん}にも事欠^{ことか}いた苦境^{くるし}に苦んでいた事もあつたが、最後の柏木に落付いた時は八十円の家賃を払い、奉公人も置き、夫婦から児供までが洋装でかなり贅沢な生活をしていた。が、これがもしスパイの余得であつたなら同志を欺くためにもこういう不当所得の看^みえ透^すかされるような真似^{まね}は決して做^しなかつたろう。

大杉が誰の口^く入^{にゅう}であつたかまたどういう名目であつたか知らぬが後藤子爵から若干金（タシカ三百円だと思つた）を貰つたのは大杉自身から聞いている。私に話したくらいだから公々然と誰に話しても差^さ支^しない金であつたのだらう。また大杉が警視庁に頼まれて仏訳^{ほけき}の法華經^{ようきやう}の賃訳をした咄^{はな}もやはり大杉から聞いた。一体仏典を歐洲語から邦訳す

るというも逆な話であるし、第一警視庁が何の必要があつて法華経を訳させたのか、頗るすこぶ変へんてこ挺な話であるが、これは大杉を窮地に陥おとしれて自暴自棄させないための生活の便宜を与える高等政策であつたろう。後藤子爵が何らかの名目で金を与えたのもやはり同じ意味で、大杉を手馴てなずけて犬とするツモリでもなかったろうし、また高が三百円かそこの僅かばかりの目腐れ金に尻尾しっぽを振る大杉でもなかった。（危険人物の激発を緩和する手段としてのこの種の高等政策は一向珍らしくないので、幸徳秋こうとくしゅうすい水も長い肺患の療養費を或る筋から給せられていたはずである。）

大杉の巴黎パリへ行つた洋行費が問題となつた。後藤子爵から或る中間者を通じて与えられたという説があるが、大杉が子爵から何百円かを貰もらつたのはモウ十四、五年も前で、二者の關係が今まで長く継続していた乎否乎は疑問である。大杉が柏木へ移転して来て久しぶりで会つた時、私が第一に訊いたのはまたこの洋行費の出処であつた。「本屋へ出鱈目のウソについて七ななとこが処借をしたのサ、」と大杉はいつた。大杉の本が売れるにしたところで二軒や三軒の本屋で欧羅巴へ出掛ける旅費が調達出来るかとその時は疑つたが、死後に大杉が本屋に残した負債が一万円以上ある事を聞いて打明け咄はなのまるきりウソでなかった事が解つた。大杉がいよいよ帰朝するからと送金を打電した時に野枝が調達に奔走して七処

借をして漸やっとこさと工面したという咄は大杉の帰朝前に聞いている。それ以外に領事館からも汽船賃その他を立換えてもらったそうだ。神戸へ帰着してから出迎えの野枝や児供と共に一等寝台車で東京へ帰った汽車賃は大杉の自由行動を防止して同志から遮断しゃだんする必要上官憲が支弁したのである。前後の事情から考えて見てもこの疑問の渡欧費は全部が本屋から調達したのでなくとも、後うしろぐら暗い金の出場でばが別にあつたとは思われない。

歴史上の事実には、今だに真相が解らなくて黒白のハッキリしない人物が少くない。大杉が果してスパイであつた乎否乎はマダ謎であるが、大杉の人物性行や日常生活から推してスパイであつたとはドウしても考えられない。大杉は直情径行でスパイの勤まる柄がらではない。もしその一本気いっぽんぎな肝癪かんしゃくや傍若無人ぼうじゃくぶじんな傲岸ごうがんが世間や同志を欺くの仮面であるなら、それは芝居が余り巧み過ぎる。ワザワザ旅費を遣つかつて仏蘭西まで行つて、仏蘭西の監獄に入られて仏蘭西人までを欺く必要もなかつたろう。

芝居乎何乎は知らぬが大杉はアナーキストとして死んだ。百年稀まれに見る自然の大破壊を背景として大陸軍を背後に控える一軍憲の手でアナーキストに相応ふさわしい最後の幕を閉じた。歐洲戦の開幕の血祭となつたジョーレスの運命はあたかもこれに等しいもので、殺害当時大杉はしばしばジョーレスと比較されたが、ジョーレスの遺骸は今やパンテオンに祀まつられ

ようと騒がれておるそうだ。骨となつてまでも宙宇にさまよつた大杉は永久に浮ぶ瀬はあ
るまいが、鼠色でも鳶^{とび}色でも歴史上の大立物^{おだてもの}となつたのは切^せめてもの満足であらう。

（大正十三年十月追記）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷発行

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「読売新聞」

1923（大正12）年10月2日～6日、8日

※初出時の表題は「此頃の大杉の思い出」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

最後の大杉

内田魯庵

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>